

特集にあたって

土谷 隆 (政策研究大学院大学)

特集というと、ある特定の旬の話題について解説し、読者すなわち会員の便に供するということが多い。とすると、この特集は少々変わっているといえるかもしれない。今回は、執筆者の方々には、書きやすいこと、好きなことを書いてください、ということをお願いした。

とはいえ、やはり、オペレーションズ・リサーチや最適化、という大きな括りはあるわけで、それが、本誌のような学会誌のありがたい点でもある。特集タイトルは、正月らしさも多少意識して「研究の楽しさ」とさせていただいた。恐縮ながら、私も執筆者リストの末尾に名前を加えさせていただいた。

いただいた原稿は取り扱う話題も、視点も全然異なっているが、それでも（自分のものはさておき）それぞれ個性的で含蓄の深い示唆に富む内容で、面白く読ませていただいた。大変多忙な中をご協力いただいた執筆者の皆様は心より感謝したい。以下、各記事を順番に簡単に紹介する。

村松正和氏は「面」について書いてくださった。今も線形計画はオペレーションズ・リサーチや最適化の基本であり、面というと多面体の面を思い浮かべることが多いが、近年の凸最適化の研究の進展により、凸最適化におけるより一般的な「面」がしばしば議論の対象となる。この「面の新しい側面」について、肩のこらない形でわかりやすく紹介されている。お正月に居間やこたつに寝ころびながら気楽に読めるのではないだろうか。「面」という題名を反映するべく、巻頭にさせていただいた:-)。

藤澤克樹氏・品野勇治氏には、計算最適化の現状と最先端について書いていただいた。大規模グラフ解析、半正定値計画、そして混合整数計画という、計算最適化の中心的問題について、実践にも裏打ちされた、夢

のある迫力のある記事を読むと、やっぱり世界一になることは大事だ！と思ってしまう。研究は面白いのですが、常に「実際の世界」と「競争の世界」を意識して研究していたいものである。

最適化を研究しているとほかの分野との関係で悩ましいのが、汎用解法と問題に特化された解法の関係である。誤解を恐れずあえて強調して述べると、どこまでが最適化研究者の守備範囲で、どこからが個別分野研究者の守備範囲か？ということである。この問題は、最適化分野の研究者であれば、きっと一度は頭をかすめたことがあることであろう。梅谷俊治氏の記事では、組合せ最適化において、汎用解法と個別問題の解法をつなぐ重要な部分についての現状と、ご自身の興味深い研究が紹介されている。

池上敦子氏は、ナーススケジューリングについて書いてくださった。記事では、ナーススケジューリングを題材として、最適解にこだわるだけではなく、良い解を集合として捉え共通の構造を探ることの重要性について議論している。問題を自ら発掘し、現場に寄り添いながら、考えを深化させていく池上氏の実行力と展開力にはいつも感心させられる。編集委員長の面目躍如といったところである。

私も、最小二乗法を一つのキーワードにして、いくつかの話題を自分の研究の展開、ささやかな経験と絡めて書かせていただいた。

本特集を通じて執筆者の皆が各々のスタイルで研究を楽しんでいる様子を読み取っていただければ幸いです。2014年が会員各位にとって充実した素晴らしい一年となることを願いつつ、本特集をはじめたい。